

# 横を向いたまま

## 日居月諸

教室の後ろのドアが開いて、クラスに馴染みの薄い教師が入ってきたかと思うと、担任に軽く会釈して窓際へと進んでいく。その唇が硬く結ばれているものだから、生徒たちはざわつきも出来ずに、音も立てない足取りを見守っていた。

教師が後ろから二番目の女生徒に声を掛けると、彼女だけが皆と同じ方を向きながらも瞳を震わせていたのだと気付いた。耳元でぼつりと何かを伝えられると、瞳は固まり、目は見開かれ、顎が上がった。眉が強ばり口元が手で覆われるのに従い、教師は集まる視線から庇うように彼女の肩を抱いて、椅子から立ちあがらせた。

二つの背中が後ろのドアへと歩いていく間、残された生徒たちは背中しか追うことが出来ず、ぴしゃりとドアが閉じられた後も沈黙は続いた。銘々が今まで自分が黙りこくっていたのだと気付くと、お互いの顔を見合わせ、時々ドアへと目を配りつつ、ひそひそと声を交わし始めた。

しきりにまたたくそれぞれの瞳は目の前の瞳をしっかりと捉えられず、相手もそうなのだと思付くと、動揺は広がる。口ぶりも上ずって、会話は成り立たない。このままでは誰もが自分の在り処がわからなくなってしまうのではないかと思われた時、破裂するような音がひびき、皆の注目が向けられた。そこには担任がいる。したたかに叩いたと思われる掌は広げられたまま教卓に乗せられ、その瞳はひとところに固まっていた。

大伯母が亡くなったと聞かされて、即座に学生の頃の記憶を思い返し

た。後でわかったところによると、あの時彼女の祖母が亡くなったのだという。女子よりも男子との付き合いが良く、他人の肩を叩いてあげすけに笑うことの多かった彼女が、思いがけず泣き顔を見せた。そんな珍しさもあるが、祖母の死を聞かされて、一瞬震えていた瞳が固まったのを、後ろの席からありありと見てしまっていた。薄々折りこみが済んでいたけれど、受け止めきれなかったのか、受け止めきれないでいたところに、トドメを刺されたのか。

訃報に接した時、私もそんな一呼吸をおいた。けれど涙は浮いてこなかった。傘寿にも届こうかというのに手が鈍るからといって朝早くから炊事を続けていたらしい大伯母が、死んでしまった。折りこんでいたことが裏切られて、どうしたらいいものかわからなくなった。泣けない自分に気付いて、なおのこと手に余った。

小学校を出て坂をくだる際、億劫になると大伯母を頼って、時には泊めてもらっていた。老婆と子ども三人が囲む食卓で聞かされた様々な昔話は、今もよく覚えている。成人してから数年ほどして亡くなったという二人目の妹は、縁談がまとまった後すぐに、病を患った。五人兄弟の末っ子で、下から見上げるしかなかったせいかわ度がうまく、特に恋心の芽生えに目ざとかった。夜更けに帰ってきた下の兄が、しばしばうつむくの気付くと、きつとニヤケ顔を隠そうとしているのだと暴いて、一晚のあいだ相手の素性を根掘り葉掘り無邪気に問い詰めていた。そんな妹によく意趣返しが出来ると、兄弟たちは見合いの席に押し寄せるほどに浮き立っていたのだが、間もなく病の診立てを告げられた。まわりの雰囲気に入りこめる子がノボせた空気にアテられたのだから、ともかくあの時は因果を感じた、嫁に行く時はひそやかにやることだね、紗江ちゃんはその子に似ているから……皺ばんだ横顔だけを見せて、大伯母は独り言のように話していた。

坂をのぼらなくなつてからは昔話を聞くこともなくなつたが、家の屋根越しに小学校の校舎を見上げると、大伯母の横顔が浮かんた。顎をあげるにつれて背まで小さくなつて、隣にはハトコたちが現れ、三人で昔話に耳を傾けている頃に戻つた気分になる。体の奥深くまで、大伯母は見上げればそこにいるのだと染みついていっているものだから、亡くなつたのだと知らされても、首を傾げるほかなかつた。

死に水というのは脱脂綿で口を潤してあげることなのだという。社会人になつたというのに葬式にも参列したことがなかつたので、母の話で初めて知つた。病によることもなく息を引き取つた唇は、水を弾くほどだつたそうだ。その頃会社には私は、母や遺族が見せたという涙に立ちあうことは出来なかつた。

姉を失つたことになる祖父は、いつもと變わりない、唇をかるく結んだ仏頂面をしていた。夕食を囲むと一週間に一回の、やらなければ気が済まないとも言ふような深酒を慣れた手つきであおつた後、風呂にも入らずに寝転んでしまつた。炬燵に潜りこんでしまつたものだから父が担ぎあげなければならず、祖母が布団を敷いて、母が着替えを用意した。

檀家の元締めじみた役目を負つているので訃報には年中接しているせいか、帰つてきて喪服から着替えると、いつも居間にごろりと寝転んでしまう。疲れたという様子でもない。堂々といびきをかいて、いっせえいせいしたとでも言いだしそうなくらい、悠々としている。それを祖母や母が、いつも世話する。

どこかで折りこんでいたのしょうよ、と溜息をつく母の顔は少しほころんでいて、むしろ人心地につかせてくれた有難味を感じているようでもあつた。私もまた、仰向いてほぐれきつた赤ら顔を見ている内に、ああいう甲い方もあるのだと自らの身がようやく落ち着いた氣になつた。

ただ通夜を迎え、喪服をそつなく整えている祖父の姿を見ていると、

以前はそんな動じなさに首を傾げていたものだと思ひ当たつて、落ち着いた心地は失せてしまつた。最後に喪服を着ていったのはいつだつたか、いつのことにせよ、普段は目につかない黒いネクタイやら数珠やらの在り処をいともたやすく探りだし、祖母や母の手を借りることなくフクサを包んでみせるので、いちいち手順を確かめなければいけないこちらが場違いに思えてくる。礼儀にまで上り詰めそうな手際良さを追つていると、ほぐれきつた仰向けの姿でさえ型通りの振る舞いに数えられる氣がしてきた。

あの子は一日だけ忌引で欠席して、といつしか学生の頃へと思ひが至り、あれ以後は気さくな姿を取り戻していた覚えしかない、けれど、立ち直るまでにまた一呼吸が置かれはしなかつたのだろうか、と今になつて探る手が伸びていった。

坂をのぼつて境内に至るとすでに人は集まつていて、あちこちで白い息を立ちのぼらせながら旧交を温めていた。祖父は隣町からやつてきた弟や妹たちと話し合い、祖母と母は本堂に入つて喪主に対する挨拶へと向かつた。婿である父は入口の前で立ちすくんだきり、煙草をくわえて、青白んだ頬をすぼませながら空を見ている。煙が立ちのぼつていく先には月も見えず、雪が降りそうだな、と父はつぶやいたが、かといつて困るといつた様子でもなく、灰が唇の先から落ちるのにまかせていた。

私も、初めこそ背が大きくなつたという月並みの旧交を確かめる言葉を掛けられたが、自分の近況ばかり話す老人たちについていけなくなつて、きつと家の中に入つても同じ事だろうと父の隣に添つていた。かといつてこうぼつりと佇んでいるのも、除け者にされているみたいだな、と父から目を離して齋場をちらちらと覗いてみると、

「あら、紗江……こつちに戻つてきた時以來かしら」

と奥の方から、着物を羽織った咲が声を掛けてきた。こちらへと歩いてきたかと思うと、その後ろから、小さな女の子がばたばたと従ってくる。

「もう歩けるようになったのかい」

煙草を足で揉み消すものの、父は目線を下げないでイトコ姪だけを見ていた。おかげさまで、と微笑みかけた後、おばちゃんと大おじちゃんよ、と子どもと大人を半々に見ながら更に顔をほころばせた。頭をかけた父に代わって、悔やみの挨拶を述べた。咲は少し首を傾げて、それから落ち着いたように一度目を伏せてみせて、来てくれてありがとう、紗江、と頭を下げてきた。その拍子に結っていた頭から数本の髪がまとまってほつれて、頬へと垂れさがっていく。

制服を着た咲を見かけた時も、そんな風に髪をほつれさせていた。その時には四年近く大伯母の家から遠ざかっていて、お互いの成長さえ知らないでいたから、電車の中にハトコが乗っていると気付けないでいた。ましてや、同じ高校と思いき男と並んでいたとなれば、嫌気さえ感じて素性を確かめる前に目をそむけてしまう。

けれど、何を話しているかは聞こえないが、そっけない声色をしているくせに目だけはちゃんと男の顔を捉えているらしいのに気付くと、ソネミは薄れて、手慣れたものだな、とどこかから借りてきたような目つきでもって感心してしまった。男はちらりと顔を向けるばかりでそれに応えない。ウブをからかうように女は笑い、それがまた男をうつつかせ

る。

後ろ姿しか見えないが、制服さえ着ていなければきつと年嵩にみえるのだろうと、顔を覗けないものかとじれったく思う内に、女が立ちあがった。私と同じ駅で降りるらしかった。それじゃあ、と告げて軽く手を振るものの、まだ扉が開かないのに取り残された方を振り向きもしない。

学ランをダボつかせた男は、またたきも忘れて女の背中を見つめるばかりだった。

扉が開き横を向いたかと思うと、あら、とこちらに気付いたらしく、ほつれた髪で頬をかくしながら、紗江じゃない、と立ち止まった。頬にかくされた顔の全容を明かそうとまたたきも忘れて見つめる内、同い年の友達のように暮らしていたハトコが、いつしか二歳差という年齢さえ通り越して、自分よりもはるかに成長しているのだと思ひ知らされた。

隣の大学に進んでから二年経つと、咲が職場の同僚と結婚したとの知らせが入った。また一年経つと出産を済ませたとの知らせも届いたが、いずれの祝辞も述べられなかった。半年ほどして実家に帰った頃、この間スパーで咲を見かけた、と母が言いだして、元々家庭を持っているみたいで育った子だったわね、お父さんたちが共稼ぎで家になかったせいかしら、オバさんの井戸端話にも興味深そうにうなずいてくれる、と電灯をまぶしそうに眺めていた。井戸端話にも興味津々だからって所帯じみてるなんてどういう理屈だか、と父がまぜかえすと、大抵オバさんなんて自分の家をどうやりくりしていくかしか考えていないものよ、だから余所の話でも首を突っ込んで参考なり反面教師なりにする、今日だつてこつちの顔を離してもせずつと見つめてくるの、昔からそうだった覚えがある……祖母もまじえた人物評がだいたい続いたところ、あれはあれの婆さんに似ている、と祖父が出しぬけに大伯母を引き合いに出してきて、どういふことかと問いかけられても、似ていると言えば似ている、と頑固を突きとおした。

「そういえばおばあちゃんね、私が家を出た時よりも、紗江が宮城に行っちゃった時の方が淋しそうにしてたのよ」

娘を抱きながら咲は笑いかけてくる。

「私や雅人はいつも隣にいたからダメなんでしょうね、きつと繰り返すを

続けていると、自分でも気づいてた。その繰り言を物珍しそうに聞いてくれる紗江が、きつと一番好きだった」

孫娘を前にしてはうなずきづらい話だったけれど、咲は笑みをくずさなかった。

たしかに大伯母をたずねて断られたことはなかった。そしていつも咲が隣に寄り添ってくれて、大伯母の話に共に耳を傾けていた。弟の雅人は遊びから帰ってこなかったり、私を撥ねつけたりしたから、なおさら咲と手を組み男の立場を悪くしようとしていた。時折繰り言や食い違いを起す昔話に茶々を入れてくる男の子を、女の子二人がかりで黙らせると、老婆は途切れた所をちゃんと覚えていて調子を変えずに話してくれる。

そう振り返ってみると、隣で共謀していた頃のハトコの姿はすでに遠ざかっており、目の前の娘を抱く母親の顔は、むしろ温かく迎えてくれる大伯母と重なりつつある。

腕に抱かれた娘が上目遣いをして見つめてきた。大人たちの話を真面目に聴き取るうとするその顔は、どこか懐かしさを感じる。その横で母親が微笑んでいるのを見ると、本当に共謀していたのは大伯母と咲なのではないか、と今になって疑わしくなってきた。

誰かが定刻を告げたようで、老人たちはまとまって本堂へと入ってきた。間違っても大声は出さぬようにとは言い含められていたが、老人たちは口を閉じなかった。記帳の間も受付に立った雅人に向かってポソポソと何かを話しては、一人で勝手に笑いをこらえている。それを見ていたら、久しぶりに顔を合わせるハトコといかに接したら良いかなどという懸念はどうでもよくなった。げんなりとした顔を浮べる雅人に、ただただ同情を寄せるしかなかった。

だけど、いざ大広間に入って遺族に黙礼すると、老人たちは黙りこくってしまう。父と並んで席を探す頃には老人たちは大方、並べられた座布団の前列に陣取っていたから、私たちは静かな中を音もたてず座るよう促されるような恰好になっていた。どこかでひそやかに声を交わし合っている者はいないかと見回しても、いずれも同じ方を向くばかりで、一体どうしてこの静けさに耐えられるのかと思われて隣を向いたが、父は入口で見せていたように口を軽く開いて背筋を伸ばすと、それきり沈着としてしまった。祖父も祖母も、母も雅人も、咲までも応えてくれない。

やむなく祭壇と向かいあうと、飾り付けられた須弥壇や花たちの真ん中に、大伯母の遺影が陣取っていた。いつ撮ったものなのか、皺ばんだ顔をしているので少なくとも年輩になった頃に撮ったのだろうと見当がつく。が、そもそも私が生まれた頃には大伯母は老いていたので、はつきりとはしない。それどころか足しげく家に通っていた頃と、遠ざかってしまっただけの大伯母はどこが違うのかと問われても答えられない私には、どんな姿を見ても間違いなくこれは大伯母だと答えられるくらい物差ししか持ち合わせていないのだと気付かされた。

遺影は笑っているが、長くは見守ってはられない。第一、写真では話しかけてくれないので、見守りようがない。けれど、参列者たちは一様に遺影と目を合わせられているようだった。語りかけてこない人と向かい合って、一体何を思い浮かべているのだろうと首を揺らしかけたが、遺族たちが立ちあがって任職を迎えたので、いよいよ押し黙らずにはいられなくなった。

任職が遺族と参列者たちに一礼し、遺影と向かい合うと、喪主のイトコ伯父から挨拶があつて、皆で合掌しながら深く頭を下げた。一呼吸おいて任職が数珠をたずさえると、経文がソランじられ始める。読経が始

まれば数珠は指の間に掛けておくべきだと教えられていたが、手を膝に乗せている人も数えられた。手元に経文をひろげているのも横目でうかがえる。いずれにせよ、皆が首を同じほうに固めていた。

経文はこれだけで夜が通せるではないかと思われるほど読み続けられたが、皆が皆、どこにそんな忍耐が備わっていたのだから、住職の一字一句を丹念になぞるような声に、姿勢を崩さず耳を傾けているようだった。

そのうち合図でもあったのか、誦経は続いているにもかかわらず、イトコ伯父が立ちあがった。住職の後ろに設えられた焼香場へと進み、右手で抹香をつまむ。ややうつむくと、つまんだ手を額までオシイタダいて、香炉にくべる。遺影と参列者にそれぞれ一札したのを受けて妻が立ち、イトコ伯母とその夫、雅人、咲の夫とつづいて、咲が立った。

焼香場から目を離さず真っ直ぐに進み、足を踏み変えて祭壇と向き合ったかと思うと、ついと顎が上がる。数珠が持ちあげられるまで、他の遺族に比べて長い一拍が置かれ、ようやく深く頭が下がっていく。抹香をつまむ時と同じように深くかがむので、娘を抱きあげる時の様子を思い出した。背筋をもどして額へとオシイタダく間も、首の角度だけはしっかりと保たれていた。香炉にくべる時も、数珠がふたたび持ちあげられる時も、また深くかがむ。足をなけば引きずるようにして三歩下がっていくと、これまで遺影の前に立った遺族たちの立ち振る舞いは、ずいぶんもつさりとしていたと思ひ返されてきた。

つづいて祖父が立ちあがったので、私の順番も意識された。大叔父や大叔母が立つと、遺族席へと座った人々は一通り焼香が済み、父が隣から前へと歩いていく。それから母と叔母が終えて、私と呼ばれた。

最初なのだから、ひとまず形式通りに済ませられるよう心掛けるとは言われたけれど、遺族に向かって礼をしてみると、それさえも難儀なものだと臉が重くなってくる。焼香場の前に立ってみると、祭壇と向かい

あっているかぎりは見えもしないのに、いくつかの目付き達が後ろからやってくると感じられて背筋が硬くなった。礼をするものの、すんなりとこなせているのかわからない。一通りなぞり終えて下がっていく間、白い目を向けられはしなかったことで、ようやく、どうにかこなせたようだとわかった。

席にもどって気取られないように息をつき、老人たちが前に進んでいくのを見ていると、座る人々はやはり立っている者を見つめているようで、自分達があの場に立った時に意趣を返されると恐れないのだろうか。と首を傾げた。しかし、そんなことは折りこみが済んでいるのだろうか諦めると、そうやって銘々が見守り見守られる様が、結束のようなのを作っていると見えてきた。この儀礼を一同で首尾よくこなしていく気負いがなければ、目の前のものには立ち向かえないとでもいうように。一同が無言でなければ、無言であり続ける死者を送れないとでもいうかのように。

すると、焼香を行っている間は遺影をまともに見ていなかったことに思い当たって、今更目をやってしまった。といっても最初に目をそらした時の印象は変わるわけでもなく、大伯母の人となりが見えられている写真を見ても、首をひとところに固めることは出来なかった。

住職が退き、喪主から式辞が述べられると、皆が思い思いに立ちあがり始めた。広間から出るとようやく喋り出す集まりもいたが、大抵は長居もせず歩きながら帰り道をたどるか、早々に切り上げて車に乗り込むようだった。父や祖母も、寝支度くらい済ませておかなければと言って、そうした流れに加わっていた。

通夜ぶるまいを手伝わなければいけない、と言われていたので、母と共に遺族をたずねると、咲からお疲れ様、と声を掛けられてしまった。

客間に通されると、すでに席は用意されており、やることと言えば酌をするくらいしか残っていなかったのだが、それさえもイトコ伯母や母が世話をした。音頭があつてからも、何もしていない自分の身ばかりが気になって、箸は伸びていかなかった。

初めは誰もが遠慮まじりにしていたのだが、祖父と大叔父の話題が噛み合いはじめると、相槌を打ちながら大叔母や任職が加わっていった。また繰り返すか、と雅人が聞こえよがしに言うのと、年寄りたちは馬鹿なことを言うもんじゃやない、と笑いながら言い放つ。これだから、とボソリと悪態をつくものの、雅人も箸を休めて上座の方を向いていた。

「まあしかし、すんなりと長女から死に始めるとは変な気分だ。どうせ九十になろうと百になろうと生きるもんだと思つていたけれど」

「死線はいくらでもクグってるような婆さんだったからねえ。あれはいつだったかね？ あの前憲に近しかったお兄さんだと気付かずに弄略しちゃつたのは……」

「私が小学校に上がって間もなくの頃ですよ。あれで靴が買えたんだから」

「どこかから噂が漏れてバイタの履いた靴なんて言われたのを、啓二がとつちめてやつたんだつた。おかげで根も葉もない噂として仕立て上げられたんだ、本当は、深い深いところまで根があつたつていうのに」

笑いはじめた祖父たちを、お父さんと、母がいさめるものの、聞きいれられはしない。任職は場が場だけあつて軽くなずくにとどめているようだったが、目元は柔らかくゆるんでいた。

「所詮お前らは潔癖な時代を生きてきたから横槍できるんだ。俺たちは違うよ、誇りを持つているよ？ 姉貴のイキザマを、ねえ」

指を差している祖父を、雅人は苦笑をまじえて見やつていた。

大伯母が体を売ることでも父を失った一家を支えていた過去は、親族は

いわずもがな、任職のような土地に根差した人なら誰もが知っている。実際大伯母自身、子どもたちにもその頃のことを臆目もなく語ってくれた。その恩恵にあずかつていた祖父が、酔うとなると自分の手柄のように語る姿も見てきた。

「確かに姉貴はバイタだったけれども、けれども間違いなくお前らは雅也さんの子どもだよ、それは間違いなく俺が保証してあげる」

勢いこんで話す叔父に対して、甥も姪も顔だけ聞くフリをして笑つており、娘は最早、止めることを諦めたようだった。

優しいのだけど、人から感謝されると面映ゆそうにする人だった。大伯母は死別していた夫をそんな風に思い浮かべていた。赤線の手前の喫茶店で働いていると、ツナギを着ているのに小ぎつぱりとした客が、いつも夕刻にやつてくる。工場勤めなど大した金は持っていないだろうと見積もつていたのだが、そもそも赤線へと踏み入ったこと自体なかったと、抱かれた時になって初めてわかった。宿へ入って体をまじえた後金をせびると、ああ、そういうことだったのか、と今更言い放つた。それでも財布を取り出し、求めた額よりも多く支払ってくれた。

明くる日に喫茶店で働く間は、言葉の割にねんごろに扱ってきたから、きつとトボけてみせたのだらうと思ひ返していた。もう来はしまいと、願うように思つていた。これ以上相手にモタれかかつてはまずいというような、年頃の女じみた恥じらいがあつたのかもしれない。翌日の夕方、小ぎつぱりとしたツナギ姿が店にやつてくると、自分はいないと伝えてくれと仕事を店長に預けてしまった。

数カ月ほどすると、借家住まいだと聞かされた。どうせウチには父親もいないから代わりとばかりに居座つたらどうだと案を差し出したところ、それもそうだな、と応えてくれた。

「大体雅也さんが香澄の縁談を持ってきてくれたんだよ、あれが結核に

やられた時だって人一倍悔やんでいたんだ、それくらいの人をどうして姉貴が裏切れるかね？」

「その割に、雅也さんが亡くなった時は涙も見せなかったけれどね。いや、だから裏切ったっていうんじゃないんだよ？ はじめからどこか間違いを犯したような連れ添い方だったからさ、愛惜よりも申し訳なきがあつたんじゃないのかね、だから裏切らなかつた、というわけで」

どうにか論理をつなぎ合わせたことで、大叔父は一段落ついたといった具合に息をつき、酒をぐいと飲み干した。住職は何も言わなかつたが、納得したようにうなずきを繰り返している。とはいえ、おおよそ正月や盆のたびに繰り返されてきたことだったから、イトコ伯母や母などはげんなりしたように顔を見合わせて肩をすくめていた。

実際のところ売春のみならず、大伯母に関係する話は誰もが知りつくしていた。

大伯母は夜になれば出歩いてしまうので、長兄の自分まで空けてしまつてはその内誰もが家から出てしまふだろうと、祖父は高校を卒業するまで一切の遊びを知らなかつた。

一方で大伯母が夫を招き寄せたために、何の差し支えもない学生時代を迎えた大叔父は、三十を越えてもなかなか所帯を持たないと親族に愚痴られ続けた。

工業の需要が生まれたことで身入りが良くなり、大叔母はお下がりをもらわなかつたどころか、何かが入用になればあつさりを買つてもらつていた。

当人たちから話された昔話は、すべて大伯母の口からも語られた。

「これで香澄も一人でなくなるんだな」祖父がぼつりと言つた。「いやあ、お袋や雅也さんだって同じところに寝かせてやつたんだが、実際母親同然に育てたのは姉貴だったから」

「この子はまともに育てないといけない、つて言つてたね。ちょうど姉貴が赤線の近くに入り浸るようになった頃に物心がついたんだつたか」

「出掛けるところについていこうとする子どもがついてくるところじゃない、と言つて、香澄が泣きわめこうが引き離してましたからね。バチあたりは今更のことだろうに」

「姉貴も香澄も、両想いだったというわけだ。つまり、これでやつと香澄は本当に淋しくなくなるんだよ」祖父が総括するように言つた。

「香澄さんは、紗代さんに憧れていましたものね」住職が口を開いた。

「若かりし頃の紗代さんはそれは綺麗でした。おまけに紗代さんは、一人で稼ぎ頭になれるくらい、自立した人でもありましたから」

「その年になつても未練を捨てられんのかね、坊さんのくせに」

流れを切るような落ち着いた口調を大叔父が茶化してやると、いやあ、いやあ、と住職はようやく顔をほころべた。この住職は、夭折した三女と同級生だった。卒業すると寺を継ぐ修行に入ったのだが、ある日買出しのために遠出してみると、昔馴染みの顔が目の前を横切つていった。顔見知りだからといって話しかけるまでもないだろうと、気恥ずかしさをまじえて見送つたのだが、剣呑な方向へと歩いていくので、何もかもいったん忘れて後ろをつけていった。もつとも、いかがわしい臭いのする奥の方までは踏み込んでいかず、手前の喫茶店へと入つていくので一安心したが、何かがあつてからでは遅いと大伯母に知らせてみると、ニワカに目を剥いた。話はわかりました、ありがとうございます、と頭を下げられて、その日はとりあえず帰された。

この話は内緒にしておくように、と断りつつ語つてくれた大伯母によると、三女は姉の勤めていた老舗の喫茶店を探り当て、店主に素性を明かすと真つ先に雇ってもらい、数カ月ほど働いていたのだという。すぐさま呼び出して詰問したものの、何一つ答えなかつた。金が欲しかった

のか、私の真似がしたかったのか、男を知りたかったのか……この話を他の兄弟三人から聞かされたことはない。もちろん住職からも——おそらく、大伯母から口封じをされたのだろう。

「よくもまあ飽きないものだ」上座に聞こえないように、ぼつりと雅人がつぶやいた。「まあ、ばあちゃんも昔話が好きだったからな、それを供養にしようってつもりか」

呑みこみはしないが、ガキのように拒みはしない、そんな度量くらいは持ち合わせているとばかりに言い捨てる雅人を、咲はおかしそうに見守っていた。そして私は、雅人の口を挟む仕事を、少しの反発をこめて見つめている。これもまた、この三人で食卓を囲んでいれば、常に見受けられた光景だった。

「供養というより、こういう風におばあちゃんの癖が残って生きていくのよ。アナタにしてみれば、面倒なものでしかないかもしれないけれど」咲がそう言うと、雅人はやれやれ、とひがんだように言っただけで目もそらしてしまっただけ。それをからかうように笑った後、咲はゆっくりと立ちあがって、手元の皿を片付け始めた。見ればテーブルの上にたくさん並んでいた料理や酒は粗方片付いて、時計も九時を回ろうとしている。母は祖父を抑えるのに忙しいと見えて、私が手伝うことにした。

洗い物をする間、咲は黙っていた。特に話すこともなかったから、私もそれに従った。咲と家事を共にすることはあったが、幼い頃は手取り足とりされていたことを思い出す。一通り洗い終えると、そろそろ娘を寝かせなくてはならない、と言って、夫が世話をしている部屋へと向かうとした。ついてくるかと訊かれ、断る理由もなかったのだから従った。

客間を横目に廊下を渡っていく間、咲はこれまで自分が黙っていたこ

とに気付いたかのように、一人で喋りはじめた。

「みんな、おばあちゃんのおかげで育っていったのね。この家も、この家の家族も。そしてこれからも、きつとおばあちゃんの姿をどこかに隠しながら、皆生きていく。それがわかったから、今日は本当によかった。紗江も、全然変わってなくて良かった」

曖昧にうなずきはしたが、咲は前方を向いていたので、それを見ていたかどうかはわからない。フスマを開けると、もう娘は布団で眠っており、父親が隣に寄り添っていた。ああ、どうも、と挨拶をしてきたかと思つくと、もうそろそろお開きかな、と妻に確かめて、じゃあ代わりに行ってくるよ、と言って客間のほうへと向かってしまった。

「この子を産んだ時ね、おばあちゃんにずっと寄り添って貰ったの」そう言いながら、咲は娘の額を撫ではじめた。「後からあの人もやってきたんだけど、女の痛みもわからずに頑張れだの大丈夫だの叫んでくるばかりで、目も合わせやしない。おばあちゃんは、手も握りもせず、ただ座って私のことを見てくれた。自分のお産の時のことを思い出していたらしいの。おじいちゃん、連絡があつても帰ってこなかったんだって。その割にツナギ姿で帰ってきたかと思うと、珍しく皺を作つて笑つて、お父さんを抱き上げたんだって。本当におばあちゃんの孫に生まれてきて、よかった」

私に語りかけているのだから、娘に語りかけているのだから、うつむいて話す咲の目は少しも動いていなかった。娘も寝息を立てているだけなので、まるで余所の家にズケズケと上がりこんでいる気分になる。

「おばあちゃんと離れて暮らしてから、一緒に暮らしてる時よりもずっとおばあちゃんが近くなった感じがするの。この子をウチで育てながら、おばあちゃんがこんな風に私に接してくれたな、って思い出すと、おばあちゃんが笑つてる姿が見えてくる。別に直接教えられたわけでもない



のに、気付いたらおばあちゃんの真似をしてる。もしかしたら真似をするよう、仕向けてきたのかもしれない。そうだとしたらきつと、この子にもおばあちゃんが、そんな風に笑いかけてくることがあるかもしれない。

紗江は、どう？」

こちらを向いてきたけれど、話を聞きながら別のことを思い出していたので、急には答えかねた。とはいえ、曖昧な返答でも咲にとつては十分だったらしく、そうよね、と一人納得したように、また横顔を向けてしまった。

こんな風に、二人で話をしていたことがある。かつて赤線で囲まれ、今は繁華街へと変わっている場所に、中学生になった咲と訪れたことがあった。買い物を買ませ、ファーストフードを食べていると、急に咲が訳知り顔をして、そのあたりの来歴を話し始めた。大伯母たちに何度となく聞かされてはいたが、まさかそこが因縁のある土地だとはなぜか折りこんでいなくて、俄然興味が湧いてきた。はじめは咲に手を引かれる恰好だったが、段々と私が出しゃばりはじめて、気付くと、警官に呼び止められていた。戦中の雰囲気を残している界隈に、知らず知らず踏みこんでいたらしい。もつとも、家に帰っても叱られることはなかった。家族のどれもが今度からは気をつけるようにと言いつつも、どこか上空で他の事を浮かべているような顔をしていた。後で大伯母にそのことを話してみると、聞いたよ、と言ってやはり咎めもせず、こちらの頭を撫でてきた。

おそらく大伯母が周囲の人間に対して知っていないことは、何もなかったのだろう。かたや私たちはというところ——

一度、大伯母と二人きりで話したことがあった。戦争が続いていた頃、同じくらしい年ごろの少年を相手に初めて肌を合わせた。空襲や物資不

足とは無縁だったこの土地は疎開先として選ばれたために、都会から来たコマシヤくれた言葉を使う少年は、周囲から浮いていた。いじめていたわけではないが、おおかた一年もすれば戻ってしまいうだろうと皆が思っていて、向こうもそんな態度をチラつかせるから、誰かと話している姿は見たことがない。そんな少年と、掘り上げてからというものの無用の長物と化していた防空壕にもぐりこんで、息を交わした。

洞穴は声を返してくるもので、外に聞こえやしないかと声をひそめていたが、どんなに堪えても鳴りひびく。なにより、そんな声をよくも出せたものだと、息を切らしながらも呆れられるくらい、喘いだ。家の中に響く親たちの息を聞き取ったことも、夜にわめきだす猫の声も聞いたことはあったが、そのいずれにもまして、体を煽ってくる。まるで防空壕の中に、もう二人、隠れている男女がいるのかと思った。それが、紛れもなく自分だったのだから世話がない。

カビと汗と血の臭いが漂う中、破瓜の痛苦に味わいつつ、余所の男と、それ以後は縁もゆかりもなくなってしまった男と交わった。そんな忘れるべき思い出なのに、洞穴にひびく声には今も引き寄せられる。金に体を預けていた間も、その喘ぎに促されていたのかもしれない。身ごもった夜にも、あの喘ぎは頭の中で聞こえていた……そう語った後、少年がどうなったのかは教えてくれず、かつて防空壕があったという埋め立てた跡が残る丘を指差した大伯母を、咲は知っているのだろうか。

もつとも、いざ娘を見つめる横顔を眺めてみると、このハトコの方が、大伯母と過ごした時間は長いことから、私よりも多くの昔話を訊いてきたのだろうという、当たり前の事実気付いた。仮に知らなかったことがあったところで、私の方が、知らないことが多いはずだ。

ふと、咲が顎をついと上げた。

「雪ね。いつの間に……」

そう言つて、窓の向こうへと目をやった。たしかに、雪が積もっている。暗い中、電灯に照らされて、白い眺めがぼんやりと広がっていた。

翌日の告別式が終わると、義仁から明日会えないかと訊ねるメールが届いた。昨日今日と葬式に出ってしまったからと返すと、納得して引き下がってくれた。が、その日の夜、床に入ってみると、死人を送ったから恋人とは会えないというのは、どういう理屈だろうと目が覚めてしまった。それに納得する方も納得する方だ……。

都合がいたら、向こうにも葬式に出たことがあるかどうか訊ねてみようかと思つて、ひとまず眠りについた。

けれど、一週間ほどして顔を合わせると、それまで考えていたことは忘れてしまつていて、店に入って夕食を済ませた後、いつもどおり抱かれていた。

事が終わると抱き寄せられながら、ずいぶんと深い交わりだったな、と息をついていた。義仁に訊くと、お前こそ、と驚いてみせる。それから、再び交わるかのように、肌を合わせてからのことを振り返り合った。

中々目を離さなかつたそう。いつもなら身をよじったり、堪えられないといった様子で目を背けたりするのに、今日は首をひとところに据え続けている。醒めた風でもない。触れられるたび、目を潤ませて、身をすくませて、伸ばしていく手を見つめている。暗闇に青く包まれた中、そんな目付きだけはしっかりと読みとれた。

「生半可なことは出来なくなつてな、いつも慎重に扱っているつもりなんだが、いつしかそれさえも思い込みでしかないんじゃないかと怪しくなつてきた。自分で言う誇張があるけど、その不実のようなものに追い立てられて、それをどうにか清算しようよと、まるでこれまでの交わりまでやり直していくような気になつて……」

そうだとすると、現在の体と交わっているのか、それとも昔の体と交わっているのか、疑わしく思われてきたけれど、けだるさが勝つて、こちらからも相手の手つきを見たままになぞつた。

私の話すことに、義仁はその都度うなずいていた。ほとんど、自覚があつたらしい。けれど、醒めていたつもりはない。けだるさが、何よりの証拠となるはずだ。

「今まで、そんなことはなかつたよな」その声に、問いかける調子はない。「お互いがお互いのことを見つめているだけなら、今までもあつた。そうだな、これまで見つめていた分が、今日になつて一気に積み重なつて、まとめて眼差しを向けて来るような……」

大伯母が笑っている顔が浮かぶ、という咲の言葉が思い返される。こういうことだったのだろうか、と思いつながら、記憶の中へと手を伸ばしていくと、抱き寄せる手が強ばつていった。どれだけきつく抱きしめてくるのだか、と胸の中から見上げると、義仁は眼をつむっていた。こちらが見上げたことに気付くと、その顔も胸に押しつけてくる。すると、背中を冷たいものが撫でていった。